

平成 12 年の放射線科の動きと今後の課題

放射線科技師長 堀 勇 二

平成 12 年は、各診療科が待ち望んでいたマルチスライス CT 装置〔シーメンス社製 道内 1 号機〕の導入が幕開けとなった。2 月 20 日より据え付け工事が始まり 27 日終了、28 日よりテスト稼働の予定がそのまま本稼働になり現在に至っている。

東京慈恵医大病院、北大病院での 10 日足らずの研修及びトレーニングで本稼働に入ったために担当者（田村技師）の苦勞は並々ならぬものがあった。又他の技師への技術指導とトレーニングに 3 ヶ月以上にわたり連日の時間外、休日も含め大変な苦勞をかけた形となった。

12 月 31 日現在 6169 件の検査をおこなった。この中で特徴的に言えることは造影剤を使用する検査が今までの旧 CT 装置より 57% 増と大幅に増えている。これはマルチスライス CT 装置の特長である、スキャンの高速性（0.5 秒）、広範囲性（体軸方向で 4 ～ 16 倍）、より薄いスライス厚（0.5mm）が得られることにより従来の CT 装置では為し得なかった微細なレベルの構造描出が可能になったことにある。このことは形態検査としての診断能を大幅に向上させ、さらには短時間で検査を行えるため患者さんの負担を大幅に軽減することが出来るようになった。これからも各種様々なソフトが開発されてきており、さらに新しい検査形態や診断形態が行えるようになると思われる。

又、X-TV 装置（東芝社製平成 2 年）の老朽化が進み使用不能となり急ぎよ更新せざるを得なくなった。この装置は消化器内科がメインとして使用していたもので、撮影はもとより内視鏡検査との併用使用が可能で使いやすい装置が大前提となった。内視鏡検査では医師や看護婦が常に患者さんの側でアプローチが行なえなければならず、X-TV 寝台の周りが広い範囲で利用できること

が望ましく谷医長（消化器内科）の考え方をベースに検討した結果アームレス X-TV 装置 900 D R 型（日立製 道内 3 台目）を導入することとなった。8 月 29 日導入されたが、より使いやすいように現場からの要望を出してもらいながらメーカーに要望改善をお願いし順調に稼働されている。

この X-TV 装置が更新されたことにより一般撮影系、透視系、CT、MRI、RI、AG と全てデジタル化された。現在フィルムとしてまた、MO、CD-R、DV-R 等様々な媒体での保管となっているが、これらを全て画像サーバに取り込むことによって統一化を図りたいと考えている。このことが近い将来のオーダリングとリンクさせることによって院内画像ネットワークが構築されることになる。

現在、約 13 ～ 14 万枚にもものぼる X-P フィルムが発生しているが、将来的には部分的なモニター診断も始まるであろうし、フィルムレス化に向けた画像保管を進めていかなければならない。画像のファイリングは点数化につながるシステムではない為に難しい問題もあるが、フィルムの保管場所（5 年間以上保存）や画像の再出しを考えると大きなメリットにもなると思われる。

13 年度では MRI 装置の導入が計画されている。マルチスライス CT 装置の画像ほど多くは発生しないが画像保管の部分では同じであり、より大きめの画像サーバを導入していきながら放射線科内の全ての画像が保管、管理出来るようコンピュータ室を設けネットワークを構築していきたいと考えている。これからの放射線科にとって一番重要な課題になると思われる。